

# 「有の遍在」を論じることについて — 『ティマイオス』解釈としての *Enn.* VI4-5—

植田かおり

## 要旨

プロティノス『エネアデス』VI4-5<sup>1</sup>は、有るもの τὸ ὄν もしくは有 οὐσία が、その同一性を保ったまま事物に遍在することを論ずる論文である。その議論は、一般に、プラトン『パルメニデス』に示された形相の分有に関する問題（いわゆる「帆布のジレンマ」）を解消しようとするものと見られてきた。だが、その問題関心はむしろ、魂や知性的実在が物体のうちに遍在するという事態をめぐる一種の心身問題にあると言える。それを論ずる議論は、多くの論点と、それらの論点を支える思想的な枠組みないし視点を、『ティマイオス』35a を解釈した魂論であるIV2 から引き継いでいると考えられる。本稿は、IV2 とVI4-5 の並行テキストの詳細な比較を通じて以上のことを論証するとともに、VI4-5 がIV2 と共有する思想的枠組みがいかなるものであるかを明らかにするものである。

## 序

プロティノスは『パルメニデス』の対話第二部<sup>2</sup>のうちに、「三つの一者」の教説を読みとった。その存在論的・形而上学的な教説こそ『エネアデス』におけるあらゆる教えと考察の基盤をなすものとして権威的な位置を占めるのであり、そこから、プラトンの他の著作もまた、この三つのヒュポスタシスのそれぞれに対応する内容を論じたものとして位置づけられ、解釈されていると見られる。たと

---

<sup>1</sup> 『エネアデス』第六巻第四論文および第五論文。以下では巻数と論文の番号のみを記す。

<sup>2</sup> *Parm.* 137c-157b.

えば Charrue は次のように述べている。「魂を扱う『パイドロス』と『パイドン』は、第三のヒュポスタシスを取りあげているのである。知性と存在を対象とする『ソフィスト』は、第二のヒュポスタシスに対応している。善または一者を主題とする『国家』第六巻、第七巻は、『パルメニデス』における第一のヒュポスタシスのうちに現れた諸概念を再び書いたものである。……『ティマイオス』に現れるのは、ヒエラルキーの二つの構成員、すなわち、知性と魂である」<sup>3</sup>。Charrue も述べるとおり、『ティマイオス』は宇宙の生成を神話の仕方でも語るものであり、『パルメニデス』の第二部から読み取られる形而上学的な教説とはその点で性質を異にするにもかかわらず、プロティノスは「デミウルゴス」を「第二の一者」すなわち知性と同一視し、宇宙の魂を「第三の一者」と同一視することによって、三つのヒュポスタシスからなる存在論との整合性を確立することになっている。それゆえに、プロティノスは同一の文脈において、躊躇なく一つの自然な論述の流れのうちに両著作への言及をなすのだと言える。他方で、体系上の整合性を論ずるだけでは、両著作にもとづく論述が一つの議論をなすことの意味を十分に説明することにはならないだろう。というのも、『ティマイオス』がプロティノスにとって独自の価値をもち、何らかの仕方でも『パルメニデス』にもとづく論述を補完するのではないならば、そもそもそれが『パルメニデス』に並べ論じられることにさして積極的な意味はないことになる。だが実際には、『ティマイオス』が宇宙論として独自の視野を有すること自体が意味をもち、そこから多くのものが引き出されているように見えるのである。我々は、『エネアデス』における『ティマイオス』独自の価値を問わなくてはならない。それは、『エネアデス』中の数多くの言及箇所の詳細な検討を必要とする大仕事となろう<sup>4</sup>。さしあたり本論攷ではVI4-5の議論に的を絞り、そこにおいて『ティマイオス』解釈がもつ意義を

<sup>3</sup> J. -M.Charrue, *Plotin, Lecteur de Platon*, Les Belles Lettres, 1993, p.118.

<sup>4</sup> 『エネアデス』における『ティマイオス』への言及箇所はプラトン著作中で最多であり、その数は『パルメニデス』への言及箇所の三倍以上にのぼる。cf. *Plotini Opera* III, Oxford, 1983, p.348ff (Index Fontium). このこと自体が『ティマイオス』の重要性を物語っているとも言える。

明らかにしたい。VI4-5 はこれまで一般に『パルメニデス』との比較において研究されてきたが、他方、その論述内容は多くの点で『ティマイオス』から抽出されたものと思われるのである。以下でそのことを明らかにしていこう。

## I

VI4-5 のタイトル「有るものは同一でありながら、同時に全体としていたるところに存在することについて *περὶ τοῦ τὸ ὄν ἐν καὶ ταῦτὸν ὄν ἅμα πολλαχοῦ εἶναι ὄλον*」は、プラトン『パルメニデス』における、形相の分有をめぐる対話の一部<sup>5</sup>にもとづくと考えられる。ここでソクラテスはいわゆる「帆布のジレンマ」に直面している。すなわち、ソクラテスは同一の形相が個々の事物に分有されることを主張するが、これに対してパルメニデスからの反論が突きつけられる。すなわち、もしも形相を一枚の帆布に喩え、諸事物による形相の分有を、一枚の帆布が多くの人の上に載せられる事態に喩えるならば、各々の人の上にそれぞれ帆布の異なる部分があるように、各々の事物はそれぞれ異なる形相の部分に分有することとなり、従って、同一の形相が分有されることにはならないだろう。VI4-5 は、このソクラテスとパルメニデスの議論を何らかの仕方でも引き受けたものと考えられる。しかし、それはどのような仕方によってであろうか。たとえば Bréhier は、プロティノスが、ソクラテスの立場、すなわち、諸事物による形相の分有が可能であることを示すために、「同一のものが同時にいたるところに全体としてある」というテーゼの正しさを論証する立場に立つと説明している<sup>6</sup>。しかし、もし Bréhier の言うとおりだとすれば、なぜ「形相 *εἶδος*」ではなく、「有るもの *τὸ ὄν*」の遍在が主題とされているのか、それをあらためて問わねばならない。じつに、ここでプロティノスが「有るもの」もしくは「有 *οὐσία*」<sup>7</sup>としているのは

<sup>5</sup> *Parm.* 131a-b.

<sup>6</sup> *Plotin, Ennéades Tome VII*, Belles Lettres, 1954, p.162ff.

<sup>7</sup> この二つの語の使い分けについては今回はおく。

「形相」ではなく、魂と知性（界）なのであり、魂が全体として物体にそなわることがいかにして可能かという問題と、知性界がいかにして部分に分けられることなく感性界にそなわるかが、議論の中心をなしているのである。たしかに、『エネアデス』において「形相」の語は多義的に用いられており、魂や知性界の形相（アイデア）を指す場合もある<sup>8</sup>。しかし、VI4-5において「形相」は素材内形相の意味で用いられており、魂や知性界が物体ないし感性界にそなわりつつも分割されることなく同一かつ全体であり続けることとの対比のもとに、形相はその存在を完全に物体に依存し、相互に他である諸部分へと分割されることが論じられているのである。さらに Bréhier は、プロティノスは同一のもの遍在という逆説の解決を『パルメニデス』の対話第二部のうちに求め、なかでも「第二の一者」（すなわち知性）を中心に考察したとコメントしている。このコメントは、誤りであるとは言いきれないとしても、事実の一面を捉えるにすぎない。例えば、もし Bréhier の立場に立つならば、魂の宇宙へのそなわりに関する問いで始まる VI4 の冒頭は、「形相の遍在」を論ずるといふ本題から少し離れた、単なる前置きに見えるであろう。だが、我々の主張では、この冒頭は、その後の議論に一貫する一つの視点を提示する役割をもっている。

魂が宇宙万有のいたるところにそなわっているのは、宇宙の肉体が一定の大きさを持ち、魂が物体の領域で分割される本性をもつからなのだろうか。それとも、魂はそれ自身でいたるところにあるのだろうか。つまり、魂は物体によって宇宙内に導き入れられたその場所にあるのではなく、むしろ物体が、自らよりも先に魂がいたるところにあるのを見いだすのであって、かくして物体がどこにおかれていようとも、自分が宇宙の部分内におかれる以前に魂がそこにあるのを見いだすのであり、そうして宇宙の肉体の全体が、すでにある魂の

---

<sup>8</sup> cf. J. H. Sleeman, *Lexicon Plotinarum*, Leuven, s.v., 1979.



うちにおかれているのだろうか。しかしながら、もし魂がそれほどの広がりをもっていて、万有の広大な肉体が現れる前にその広がりをくまなく充足しているのであれば、どうして魂が広がりをもっていないことがあろうか。それに、宇宙が生じる以前に魂がその宇宙の中にあるというのはどういう意味なのだろうか。事実、宇宙はまだなかったのに。また、部分もなく大きさもないと言われている魂が、大きさをもっていないにもかかわらず、宇宙のいたるところに遍在するなどということ、人はどうして受け入れることができようか。(VI 4,1,1-8)

この一連の問いかけは、『ティマイオス』における「諸物体の間に生ずる分割可能な有」(35a)という言葉と、デミウルゴスが宇宙の肉体を宇宙の魂の内部に組み立てたと述べられる箇所(36e)の「魂は宇宙の果てにいたるまであらゆるところに織り込まれた」という言葉に対して向けられている。ここで魂の遍在は、一定の広がりをもった肉体のうちに入ることによって魂が分割されることとしてではなく、魂それ自体が肉体へのそなわり以前に「いたるところにある」として理解され、その上でさらに疑問が提示されている。すなわち、広大な宇宙がそなわるだけの広がりを魂がもつならば、「部分も大きさもない」とされる魂が大きさをもつことになってしまうことへの疑問であり、さらに、宇宙がまだないときに生じた魂が宇宙の中にあるという事態の不条理さへの疑問である。これらの疑問にプロティノスは答えていないが、それは、そもそも、これらの疑問に一定の解答を与えることが論文の直接の目的ではないからであると思われる。プロティノスの問題意識は、むしろ、こうした疑問が何によって生じるかということにあると思われるのである。続く章において、プロティノスは次のように述べている。

だが我々は「有るもの」を感覚されるもののおき、さらには「いたる

ところに（ある）ということ」もまたそこへとおいてしまうことによって、感覚されるものを大きいと考えるゆえに、これほど大きなもののうちに、かのもの（「有るもの」）は一体いかにして延び広がることができるのだろうかと思ひ悩むのである。（VI4,2,27-30）

有の遍在への疑念は、魂や知性界といった感覚されないものを感覚されるもの（物体ないし物体の性質）のように考え、「あらゆる」や「そなわる（中にある）」という語を物体について語るように語ることで生じるのである。IV4-5の議論は、感覚的事物を考察するのに馴れきった思考のあり方を正すことによって、有の遍在への疑問そのものが不自然に解消していくことを狙うものだと言えよう。そのために、魂や知性のあり方を、物体のあり方とは異なるものとして捉える思考の方法を示そうとするのである<sup>9</sup>。

さらに、魂の宇宙への遍在のあり方を問うこの冒頭は、「有の遍在」という問題を論ずるために必要な原理的な視点を提示するものだとも言える。なぜなら、「有の遍在」の考察において、「有」それ自体における可分性や不可分性を語るだけでは不十分だと考えられるのであり、その点で、『パルメニデス』第二部の記述そのものからは引き出されない論点を必要とする。つまり、有の遍在の問題があくまでも、感覚的事物への遍在の問題である以上、感覚的事物との関わりにおける有の同一性／不可分性が語られる必要がある。「有」自体の問題と、その「有」が感覚的事物にそなわることの問題とを区別した上で、その連関を考えねばならないのである。このように解するならば、VI4-5は、有である魂および知性と有でない感覚的事物の区別にもとづき、前者の后者への遍在を論じるものに

<sup>9</sup> O'Meara は、VI4-5 でプロティノスが問題としているのは有の遍在という事柄それ自体ではなく、それを理解することにおける我々の困難さであることを指摘し、VI4-5の目的は知性的実在の遍在を「理解しやすくする」ことにあるのであって、それを「証明する」ことにはなく、この論文において証明は教えを理解しやすくする手段にすぎないと主張している。cf. D. O'Meara, *The Problem of Omnipresence in Plotinus Ennead VI, 4-5: A Reply, Dionysius* 4, 1980, p.60, 64, n.6.

ほかならない。言い換えれば、VI4-5 は一種の心身関係論なのである。

VI4-5 を心身関係論として見るべきことについては Emilsson がすでに論じている。彼は、「帆布のジレンマ」として通常想定されるのは、ある種の形相を、その種に属する複数の事物が分有する（例えば馬の形相を多くの馬が分有する）という事態であるが、そうした意味での「形相の分有」はここでのプロティノスの関心の対象ではなく、問題とされているのは個々の生きものへの一つの「魂」もしくは「生命」のそなわりであると主張している<sup>10</sup>。すなわち、VI4-5 の主要な関心は、もしも魂が分割されないとしたら、いかにして多種多様な——文字通り、馬の種に属するものであれ、人間その他の種に属するものであれ一切の——生物が生じうるのか、ということにあるのである。この Emilsson の見解に対しては、火のアイデアの分有が論じられるVI5,8 や、VI5,11 において三角形のアイデアの分有が論じられることをはじめとして、アイデアの分有について述べられている箇所があることが、反論の材料として挙げられるかもしれない。しかし、これらの箇所の議論も、最終的には魂や生命の遍在の議論を補うものと見ることができる。たとえば、VI5,8 の火のアイデアの分有の議論は、次章へと引き継がれていく中で、感性界の原因者としての知性的な生命ないし宇宙の魂の同一性を論じる議論へと集約されているように見える。また、VI5,11 の三角形のアイデアの分有についての論述は、非延長的・非時間的な「同一のもの ταὐτόν」（この「同一のもの」は、一つ前の章から引き続き、知性的な生命または魂を指していると考えられる）の遍在を語るために用いられたアナロジーであって、一つの説明手段にすぎないと見ることができる<sup>11</sup>。ここから、「帆布のジレンマ」は、もはや形相の分有の問題に留まるものとしてではなく、物体（肉体）への魂ないし生命の遍在を問うと

<sup>10</sup> E. K. Emilsson, Plotinus' Ontology in Ennead VI.4 and 5, *Hermathena*, No 157, Winter 1994, p.98. 本稿は基本的にこの Emilsson の見解に賛同しつつ、『ティマイオス』解釈の重要性を、テキストの比較検証を通じて考察するものである。

<sup>11</sup> cf. VI5,11,31-32 : " πάρεστι δὲ ταὐτόν πάντη, οὐχ ὡς τὸ ἐνυλον τρίγωνον ἐν πολλοῖς πλείω ὄν ἀριθμῷ ταὐτόν, ἀλλ' ὡς τὸ αὐλον αὐτό, ἀφ' οὗ καὶ τὰ ἐν ὕλη".

いう意味において、一種の心身問題として捉え直されていると言ってよいであろう。

上記の点に加えて、Emilsson はもう一つ大事な指摘をしている。それは、VI4-5 の議論を支える思想的背景としての『ティマイオス』の重要性である。彼は、『ティマイオス』35a の解釈を通じて魂の両義的規定「不可分かつ分割可能」の意味を論じ、魂は分割を被ることなく全体として物体にそなわるという思想を展開した IV2 が、VI4-5 における多くの議論の原型となっているとする。我々はこの指摘が正当だと考える。というのも、先に触れたように、VI4-5 において「有の遍在」の論述は、「有」と「有でないもの」を厳密に区別する二分法的な枠組みにもとづくが、この枠組みの原型はすでに IV2 に示されているのであり、VI4-5 の論述はこれを基軸としていると見られるからである。以下で、この二分法的な枠組みによる論述の特徴を見ていくことにしよう

## II

「魂の本質について」と呼ばれる IV2 は、『ティマイオス』35a の解釈を通じて、「分割可能かつ不可分」という魂の両義的規定の意味を論ずるものである。そこではまず、知性、魂、素材内形相、物体の四者<sup>12</sup>が論じられるが、『ティマイオス』においては知性対象、物体、宇宙の魂の三者がいずれも「有」と呼ばれているのに対し、プロティノスは四者のうち素材内形相と物体については「有」と呼ぶのを避け、「本性、もの φύσις」の語のみを用いている。それは、プロティノスが『ティマイオス』を解釈するにあたって、「有」と「有でないもの」を「分割可能性」を尺度として峻別する論点を持ち込んだゆえであると考えられる。この二分法的視点こそ、IV2 と VI4-5 に共有されているものである。この視点がどのように両

---

<sup>12</sup> プロティノスが「素材内形相」を加えた四者を『ティマイオス』に読み込んでいることの意味については以前に論じた。植田かおり「プロティノスにおける魂の両義的規定の意味—『エンネアデス』IV 2 (4) の解釈—、『新プラトン主義研究』第 8 号、プラトン主義協会、2008 年。

論文に現れているのかを見ていくことにしよう。

この視点の一つ目の特徴は、魂のあり方を、物的なあり方と厳密に区別することである。その顕著な例として、IV2,2,32 以下において、魂と素材内形相の比較を通じて魂の同一性が主張されていることがあげられる。それは、『ティマイオス』35a に示される「不可分」／「分割可能」の規定の内実を明らかにすることで魂と素材内形相の両者を厳密に区別する論述であり、それが同時に有と有でないものの間に境界線をひくことともなっている。すなわち、物体内の色や質といった素材内形相は、物体同様の第一義的な「分割可能性」をもつものではないが、物体にその存在を依存する物体の「性状  $\pi\acute{o}\theta\eta$ 」にすぎず、「有」ではないとされる。物体の広がりと同様の広がりをもたざるをえないために、同一性を保ちえないのである。そのことは、物体内形相の諸部分が互いに同じ影響を受けることがないという事実によって証明される。これに対して、魂は、「物体に自己を与えたとしても、それ以前の不可分な有としてのあり方を保ち続ける」とされる。そして、その不可分性は、魂の働きである感覚知覚の同一性によって説明されている。このIV 2 の議論と同様の主張が、VI4-5 でもなされている。

甘さや色彩のような性質が物体の隅々にまで行きわたっているようにして、魂も物体の隅々にまで行きわたっているのではないからである。すなわち、甘さや色は物体の性状 ( $\pi\acute{o}\theta\eta$ ) である。だから、物体はその性状を自らに付随する状態として全体に所有しているのであり、その性状は物体のものなので、それ自体は決して存在せず、物体に所属しているときのみ知られるのである。だからこそどうしても自らの属する物体と同じ広がりのものである。 (物体の) ある部分に属する白さが、別の部分に属する白さと経験を共にすることもないのである。さらに、白さの場合、その属する部分が互いに異なっても種においては同じであるが、数においては同じではない。だが、魂の場合、足にも手にも、数において同じものが内在しているのであって、それは

感覚知覚が我々に示すとおりである。(VI4,1,17-29)

ここでは「甘さ」や「白い」といった物体の性質（素材内形相）と魂が比較されている。この議論には、IV2には見られない「種において同じ」／「数において同じ」という対比的な表現が見られるが、その意味するところは、物体の各部分の「白さ」は、「白さ」という種（εἶδος）において互いに同じものであると言えるだけで、実際には部分ごとに異なる複数の「白さ」となっているのに対し、魂は、肉体の複数の部分に、数の上で同一のものとしてあるということである。両者の判別基準が「経験の同一性」の有無におかれていることから、この議論は、IV2で示されたのと同様の主張を繰り返したものである。また、VI4-5が『ティマイオス』に基づく感性界の成り立ちとその原因を考察するという宇宙論的なし自然学的な視点をもつことをも示している<sup>13</sup>。かくして、有と有でないものの区別は、宇宙の原因と宇宙の、ひいては、知性的存在と物物的事物の区別にほかならないことが明らかである。

二つ目の特徴は、この二分法的な視点において魂と知性の区別は強調されず、むしろ連続性が示される点である。IV2においては、魂と知性の関係を見る視点には二つあると言える。すなわち、一方で、知性、魂、物体内形相、物体の四者を俯瞰する視点においては、魂はその「不可分かつ分割可能」の性質により、「第一義的に不可分」とされる知性とは存在の身分の上で区別される。他方、「有」であるか否かという二分法的区別にもとづく視点においては、魂の分割可能性は「物体の領域において」として限定され、有において魂は不可分であると述べら

<sup>13</sup> 「有」を超える超越的な原理である一者もまた、IV2やVI4-5の議論においては、固有の場所を与えられないか、あるいは少なくとも、知性と厳密に区別された一者の超越的性格に焦点は当てられていない。そのこともまた、自然学的・宇宙論的な議論の特徴と見ることができると考えられる。この事実も、この自然学的な論述が、一者からの諸存在の発出や一者への帰還を論じる際のようにプロティノスの思想体系全体を俯瞰する視点とは異なり、あくまでも『ティマイオス』の記述に基づいて感性界の成立を語るという、限定的な議論の場におけるものであることを証していると思われる。

れる。つまり、魂の両義的規定は「不可分性」に重心をおくものとなっている。この文脈では、魂の神的な性質が強調され、知性との類縁性が語られることとなる<sup>14</sup>。VI4-5においても、「有の遍在」のテーマのもとに、有の同一性・不可分性を論じる上で、魂と知性の両者は連続的に論じられているのであり<sup>15</sup>、そのことは、VI4-5の議論がこの二つ目の視点を共有していることを示すと言える。

以上二つの特徴は互いに相関的である。というのも、感性的・物的なものから知性的・精神的なものを区別することに力点をおくからこそ、それと相関して魂と知性との間の厳密な差異は強調されなくなると考えられるからである。次に、IV2とVI4-5の並行するテキストを比較し、同じ視点が共有されていることを確認したい。

IV2,1,53以下は、魂の不可分性を強調する論述となっている。すなわち、魂は諸物体にそなわることで「分割可能」となるが、物体に自分自身を与える以前に分割をこうむることはないとされる。ここで「以前」が表すのは、時間的前後関係における「前」ではなく、魂の本来性の次元である。そして魂は、物体にそなわるときもこの「以前」の不可分性と同一性を失うことはないとされる。こうした事実を認識する人から見た魂のありようが、次のように述べられている。

この事実を看取した人は、魂とその力を観て、魂というものがいかに神的で驚嘆すべきものであるかを、そして魂が諸事物を超えたものどもに属している τῶν ὑπὲρ τὰ χρήματα φύσεων ことを知るであろう。魂は大きさをもっていないものであるけれども、ありとあらゆる大きさとともにありここにもありあそこにもあるけれども、ここやあそこにあるのはその魂の異なった部分ではなくて、同じ部分なのである。(IV2,1,66-71)

---

<sup>14</sup> IV2,1,68-69.

<sup>15</sup> cf. A. H. Armstrong, *Plotinus VI*, Cambridge, 1988, p 270.

「この事実を看取した人」の視線は、宇宙の中に生きる人が、宇宙を支配管理する神的存在としての魂を驚きをもって眺める視線である。こうした魂の神的な身分の表明は、続く箇所、感覚の成立や、魂が宇宙の肉体に生命を与えるという事態が、魂のニュートラルな「働き」として論じられるのではなく、魂による個々の肉体や宇宙の肉体の「管理」と捉えられていることとも符合する。

もし魂が物体のようにそれぞれ異なった部分をもっていたならば、そのある部分が影響を受けても、別の部分はその影響に気づかず、例えば指の領域にある魂だけが、他とは独立した魂としてその影響に気づいたことだろう。そして要するに、われわれ各人を管理する *διοικοῦσαι* 多くの魂があることになっただろうし、さらに、この宇宙を管理するのは、一つの魂ではなく、互いに独立した無数の魂であることになっただろう。すなわち、諸部分の連続にたよる説は、「一つのもの」に仕えるのでなければ無意味なのである。(IV2,2,4-12)

肉体や感性界に命を与えることは、「管理」または「指導」なのであり、したがって、そこには指導者に相応しい「思慮」や「導き」があることになる。IV2の最後の箇所において、魂の管理・指導が「思慮深い導き」として語られているが、その思慮深さは魂の不可分性・一性と結びつけられている。

以上の論述に誤りがないとすれば、魂は一であるとともに多であり、「部分に分けられているもの」であるとともに「不可分なもの」でもあるのでなければならず、「同じ一つのものがいたるところにある」のは不可能ではないかと疑ってはならないことになる。というのも、もし我々がこの事実を受け入れなければ、万有をまとめて管理するもの *ἡ διοικοῦσα φύσις* が、すなわち、万有を一括して自己自身の内に含みもち、思慮深く導く *μετὰ φρονήσεως ἄγει* ものがないことになってしまうからであって、その万有の管理者は、・・・自己自身



が多なる一であることによって部分的なものすべてに生命を与え τῷ πολλῷ αὐτῆς ἐνὶ ζῶνι χορηγοῦσα、自己の不可分な一によってそれらを思慮深く導く τῷ ἀμερίστῳ ἐνὶ φρονίμως ἄγουσα のである。そして、思慮なきもの（物体）は、指導者たるこの一 τὸ ἐν τὸ ἡγούμενον を模倣するのである。（IV2,2,42-48）

ここでは、魂の両義性の議論が、『パルメニデス』にもとづく遍在の議論（「同一のものがいたるところにある」のは不可能ではないかと疑ってはならない 41-42）と結びついていることが明らかであり、「遍在」は、魂の感性界の「指導者」たる魂のあり方によって説明されると考えられている。このことは、プロティノスが遍在の問題を心身問題と捉えているとする我々の見解を支えるものである。

ここで、IV2 で示された魂の同一性・不可分性をめぐる議論の内容を一旦まとめておこう。すなわち、1) 魂は有であることにより、物体にそなわりながらも本来的な不可分・同一のあり方を保つ。2) それは、神的な驚嘆すべきあり方であり、魂が真実在の一員であることを示している。3) 魂はその有における本来的な同一性によって感性界を思慮深く管理・指導する。思慮をもたない物体は、この指導者を模倣する。

### III

前節で確認した 1) ～3) の論点が、VI4-5 の最終部分 (VI5,9-12) の議論に共通しているのを見ることができる。この議論が一貫して心身関係論の性格をもつものであることを次に確認していこう。

VI5,9 の冒頭は、感性界の制作の原因 τὸ αἰτιὸν τῆς ποιήσεως（制作者 τὸ ποιοῦν とも言い換えられる）の同一性・不可分性を論じるところから始まっている。

その球（感性界）の制作の原因はただ一つである。なぜなら、その原因が自己自身の全体でもって作ったのであって、そのそれぞれの部分はその球のそれ

それぞれの部分を作ったのではないからである、と言わねばならない。なぜなら、もしあなたがその制作を、分割不可能な一つのものに帰さないのであれば、いや、むしろ、その球の制作者が一つの不可分のもので、制作者自体が球の中に四散してしまうのではなくて οὐκ αὐτοῦ χυθέντος εἰς τὴν σφαῖραν τοῦ ποιοῦντος、球全体がその制作者に依存している ἀλλὰ τῆς σφαίρας ὅλης εἰς τὸ ποιοῦν ἀνηρημένης のでなければ、再び多くの者が、その制作に関わってしまっていることになってしまうからである。そこで、同じ一つの生命がその球を維持し、球それ自体が一つの生命の中におかれていることにもなるであろう。もしそうであれば、その球のなかにあるすべてのものも、一つの生命に帰されることになる。してみると、魂もすべて一つであることになるが、それはしかし、限りのないものであるという意味で一つなのである。だからこそ、ある人々は魂を数と言ひ、別のある人々は魂の本性を「自分で増大していくロゴス」と言ったのであり、後者の場合には、おそらく、魂はいかなる点においても欠けたところのないもので、自己自身のあり方を保ちながら万物に及んでいる」と思われたのであろう。魂の力は、この宇宙がこれ以上大きければもはや及ばなかったのではないかと心配されるほど欠点のあるものではなかった。いや、この宇宙は、魂全体のなかに横たわっているのである。(VI5,9,4-18)

プロティノスは『ティマイオス』のデミウルゴスを知性と解しており、ここでの「宇宙(感性界)の制作者」も知性を指している。ここで、宇宙の制作者は一つの不可分のものでなくてはならないことが主張されている。すなわち、もしも制作者が多であれば、宇宙の部分は、それぞれが互いに異なる制作者によって制作されたことになるので、宇宙は一つの球として成り立つことがない。従って、宇宙の全体が一つの不可分の制作者に依存しているのでなくてはならないのである。注目すべきは、宇宙の「制作者」と「魂」の間に『ティマイオス』にもとづく身分の違いがあることが含意されているとしても、その一方で、制作者(知性)

の同一性を主張する論述は、魂の同一性を主張する論述と大きく異なっていないということである。すなわち、ここで批判されているのは知性を宇宙の肉体の中で「四散する」ものとみなすことであり、この論述は、「魂が肉体の部分ごとに異なる部分をもっていたら我々の各人もこの感性界も複数の魂をもつことになる」というIV2における批判と基本的な論点（原因を分割されるものとみなすことの不合理性）を共有していると言える。また、「依存している *ἀντηρῆσθαι*」の語は、始源や支配者などへの全面的な依存関係を示すために『エネアデス』の多くの箇所でも用いられているが<sup>16</sup>、依存の対象は知性にかぎらず、魂や自然など様々であって、知性に特有の身分を表すものではない。物体の可分性と対比のもとに非物的実在の一性を述べるこのテキストにおいて、知性と魂の根本的な区別は語られないのだと言えよう。議論は後半において、宇宙の魂の「一つ」の意味の論述に移っているが、そこでもまた、両者の同一性の内実における違いは問われてはいないのである。

このテキスト後半における「魂の力」の偉大さへの言及は、IV2,2において「このことを看取する人」が目にした神的な指導者である魂の記述と並行する記述と見ることができる。「宇宙は魂全体の中に横たわっている」という表現はIV2に見られないが、「中に」で示されるのは、場所的な包含関係ではなく、宇宙がその存在の一切を魂に依存していることであり、従ってこの表現は魂の指導者としての身分を表すものとしてIV2,2の議論の延長線上におくことができる。

これに続くテキストでは、魂が「一つ」であることと指導者であることとの関係が述べられていく。すなわち、VI5,9,19-39において、魂の「一つ」は、計測可能な（つまり量的な）一、したがって分割を余儀なくされる一ではなく、「欠けたところのない」「自らの中に無限かつ多であること」<sup>17</sup>を秘めた一であるとされ

<sup>16</sup> J. H. Sleeman, *op. cit.*, s. v..

<sup>17</sup> cf. 『パルメニデス』144e4-5. 「自らのうちに多を含む一」のあり方を、プロティノスは基本的には知性について述べている（V1,8,26, V3,15,11 et 22, VI2,2,39-40, VI4,11,18-19, VI7,14,12 など）。魂のあ

る。そして、以下のテキストでは、そのような全き一であるゆえに、魂は「自己自身から離れることがない」ことが述べられ、その揺らぐことのない同一性こそ、魂を感覚的事物の指導者たらしめるとされている。このように、魂の遍在を語ることは、心身関係における魂の身分を語ることにほかならない。

以上の通りであるとすれば、その「一つのもの」は、他のもの（感覚的事物）から場所によって分離されているものではないことになる。つまり、それは場所の中にあるものすべてに先立つものであり、それ自体は場所の中にあるものどもを必要としなかったけれども、場所の中にあるものどもは自らを据えるべき居所を得るために、どうしてもそれを必要としたのである。だが、場所の中にあるものどもが居所を与えられても、あの「一つのもの」は、自己自身の中の自己の座を離れてしまうことはないのである。なぜなら、あの「一つのもの」の座が動揺すれば、場所の中にあるものどもの基礎やそれらを固定しているものが崩壊し、かくて場所の中にあるものどもが崩壊してしまうことになったであろうし、それにまた、あの一つのものは、自己自身から離れて自己自身を引き裂いてしまうほど愚かでもなければ、自己自身の中に留まって全きを得ているのに、自己を保全するためにはその「一つ」のものを必要とするようなあてにならない場所に自分をまかせせるほど愚かでもなかったのである。かくして、この「一つのもの」は、健全な思慮の持ち主であるから自己自身のなかにとどまり、他のものの中に入っていきことはありえないのである。これに対して、場所の中にあるものは、いわば憧れによってその「一つ」のものの居所を見つけ出し、それにぴったりとついている *ἀνθρώποι*<sup>18</sup>のである。(VI.5,9,40-10,3)

---

り方としてこれが述べられていることは、Emilsson が指摘するように「知性と魂の形式上の区別は最小限に縮められている」ことを示している。E. K. Emilsson, S. K. Strange, *Plotinus Ennead VI.4 & VI.5*, Parmenides Publishing, 2015, p.256. 魂や知性といった有が「場所によって多」ではないことを示し、魂や有がそれ自身の内に「多」を含んでいるとする議論は、VI.4,4,35 でなされている。

<sup>18</sup> すでに見たとおり、この語は、VI.5,9 冒頭で感性的事物の知性への依存を表すために使われていた。

ここでは魂と感覚的事物の関係が描かれているが、この関係は、IV2の終盤に示された宇宙の指導者である魂とその指導下にある感覚的事物の関係と構造上同一のものであると言えよう。IV2では、魂は自らの「不可分な一」であることによって事物を「思慮深く導く」とされていた。ここでもまた「思慮深く」とは、多なる事物を「一つにまとめ」、それらが存在し続けることを可能にする魂の働きのあり方を表しており、その働きは、魂自身が同一性を保持していることにもとづく。「思慮をもたないものは『一つのもの』の居所をみつけだし、いわば憧れをもってそれにびったりと付いている」とは、無論、場所的な居所や、空間的な接近を意味するのではなく、感覚的事物の「一つのもの」への指向性と依存性を表している。これは、IV2,2,49の、「思慮のないもの（感覚的事物）はこの一つのものとしての指導者を模倣する」の記述と比較しうる。「模倣する」は、指導者の一性を真似ることで生命と存在を得る<sup>19</sup>という、指導者に依存した感覚的事物のあり方を示すと考えられるからである。

以上のように、VI5の9章から10章前半において魂と感覚的事物との関係が論じられているのであるが、「有の遍在」を論ずるという論文全体の目的は、実質的にここで達成されていると言うことができる。残る10章後半から12章にかけては、それまでに述べられた内容を繰り返し、まとめたものと言えるからである。例えば11章以下の議論では、知性的なものが広がりをもたないことについて、VI4冒頭で出された問いが繰り返されている：「では、どうして広がりのないものが、これほどの大きさをもつ宇宙の肉体全体に広がるのであろうか。どうしてそれは分散せずに同一のものとしてあるのだろうか」。VI4-5の冒頭で魂について問われた問いが、ここでは「知性的なもの」について問われている。そして、その問いへの答えもまた、知性界の感性界への遍在に焦点が当てられてはいるも

---

<sup>19</sup>『プロティノス全集』は、「模倣する」という訳語の後に、ギリシア語テキストにはない「ことによって生命と有を得る」という言葉を補っている。正当な解釈と思われる。田中美知太郎、水地宗明、田ノ頭安彦（訳）『プロティノス全集』第三巻、中央公論社、1987年、24頁。

の、魂の肉体へのそなわりに関して述べられた事柄をなぞるものである。それは、論文の最終章の冒頭において、知性的なものの遍在が、生きものへの生命のそなわりとして語られていることにも明らかである。

それ（知性的なもの）は一つの生命としてそなわっているのである。なぜなら生命は、生きもののある部分には達するけれども全体には達しないのではなく、生きものいたるところに及んでいるからである。（VI5,12,1-3）

プロティノスにとって、有の遍在を語ることは、同一の生命が生きもの多様な肉体に及んでいることとして説明されるように、あくまでも心身関係を語ることなのである。

## 結びに代えて

VI4-5 の論述の多くはIV2 を原型とするものであり、ひいては『ティマイオス』解釈を通じて引き出されたものであることを確認してきた。両テキストの論述の共通性は、宇宙の原因（指導者・制作者）を宇宙の内部から眺める眺望を両テキストが共有していることによっていた。このようなIV2 とVI4-5 の共通性に目を向けた一方で、本稿では、VI4-5 の、IV2 と異なる独自の点については論じることが出来なかった。ここではさしあたって、以下の点にのみ触れておきたい。

先に見たように、IV2,2 において、魂が「一かつ多」であり「分割可能かつ不可分」である事態の理解にもとづけば「同じ一つのものがいたるところにあるのは不可能ではないかと疑ってはならないことになる」と述べられていた。だがここでは、「疑い」それ自体が問題として取り上げられているわけではなかった。IV2 は、『ティマイオス』に語られた魂の両義的規定の意味をフォーマルで簡潔な仕方でも開陳する場なのである。しかし、他方、感覚的現実のうちに生きる人が抱くかかる疑念が、その人を正しい思考の道から外れさせ、思考の行き詰まりや

誤った認識へと導くことになるとすれば、その疑念を晴らす言論が、IV2とは別に必要となろう。その必要性こそ、VI4-5の執筆動機であると見ることができる。先に引用したIV4の冒頭で、プロティノスは、魂が宇宙のいたるところに遍在するという『ティマイオス』の記述に対して人が抱くであろう疑念を代弁していた。プロティノスはそれに直接答える代わりに、次のように述べている。

魂は非物的なもので大きさのないものであるのに、物体の存在する以前であらうと物体内であらうと、どうして最大限に広がりうるのかが、我々にとって容易に納得のいくことであり、明白なことであるのかどうかを話していくことにしよう。(VI4,1,29-32)

ここで意図されているのは、有の遍在を論証することではなく、それに対して「我々」が抱く疑念の一つ一つに答えながら、有の遍在という事態を理解させることである<sup>20</sup>。この目的は、VI4-5の論述が、IV2のそれとは異なり、散漫で繰り返しの多いものとなっている事実と符合すると思われる。つまりその散漫さは、有の遍在の理解を妨げるさまざまな疑念に答えようとして何度も同じ問題に立ち返っていることに由来するのである。第一章で見たように、プロティノスはこの疑念の原因を、魂や知性をあたかも物体のように考え語る我々の傾向に帰していた。従って、プロティノスにとって、心身関係の問題とは、魂と物体の関係そのものの問題であるのみならず、それを論ずる我々の思考と言葉の問題でもある<sup>21</sup>。「有の遍在」を語るこの意味を考察するには、心身関係論のこの側面をさらに検討する必要がある。これを今後の課題としたい。

---

<sup>20</sup> 注9を参照。

<sup>21</sup> プロティノスは、「同一のものの遍在」に対する我々の疑念が言論の問題に起因することを論じている。cf. VI5,2,1-10.

## 参考文献

(底本)

Henry, P. et Schwyzer, H-R., *Plotini Opera (Editio Minor)* III, Oxford, 1983.

(翻訳・参考文献)

Armstrong, A. H., *Plotinus VI*, Cambridge, 1988.

Bréhier, E., *Plotin, Ennéades Tome VI 1*, Belles Lettres, 1954.

Charrue, J. -M., *Plotin, Lecteur de Platon*, Les Belles Lettres, 1993.

Emilsson, E. K., Plotinus' Ontology in Ennead VI.4 and 5, *Hermathena*, No 157, Winter 1994.

Emilsson, E. K., Strange, S. K., *Plotinus Ennead VI.4&VI.5*, Parmenides Publishing, 2015.

O'Meara, D., The Problem of Omnipresence in Plotinus *Ennead VI, 4-5*: A Reply, *Dionysius* 4, 1980.

Sleeman, J. H., *Lexicon Plotinarum*, Leuven, 1979.

田中美知太郎、水地宗明、田ノ頭安彦（訳）『プロティノス全集』中央公論社、1987年。